

正しさについて

作　ただその子

構成　うんこ太郎

プロローグ

電車をホームで待つ人々

駅長「まもなく3番線に電車が参ります。白線の内側までお下がりください。電車が参ります」

電車が来る。電車に乗る人々

駅長「発射します。」

優先席に座る若い女性と体格の良い男性。

その前に足に障害をもっているであろう男が杖をもって立っている。

駅長「急停車します。急停車します。」

電車にブレーキがかかり、杖をもった男が体勢を崩し、となりの男にぶつかる。

杖をもった男は、ぶつかったことを謝る。

となりの男は優先席に座っている若い女に声をかける

隣男「譲ってあげたほうがよくないか」

若女「あ、すいません。：どうぞ」

杖男「あ、ダイジョブです」

若女「っていうことがこの前あったんですけど、

どうしてとなりの男性じゃなくて私だったんですかね。へっ！」

人々はゲルニカの絵のようにうごめき、去っていく。

第1場

#1　アウトロー

3人の男がパチンコ屋で台を打っている。

山本 昼食いました？
斎藤 ん。まだ。
山本 おなかすきません？
斎藤 もうちょっと待っていま出そうな気がするから
山本 まじっすか。
斎藤 なんとなくだけど。
山本 え、蓮見さん食べました？
蓮見 まだ。
山本 いつも昼たべるときどこいきます？
蓮見 向かいのカレー屋
山本 うまいんすか あそこ
斎藤 食べないほうがいいよ。ルーだけ、具がないから。
蓮見 全部溶け込んでるんだって。
山本 ほんとっすか。
蓮見 ほんとかどうかは知らないけど。
山本 え、味はどうなんすか。
斎藤 あ、カレーだなっていう
山本 なんすかそれ 蓮見さんも同じ感想ですか
蓮見 おれはちよつと違うかな。
山本 どんな感想なんすか
蓮見 だから。あ、カレーだなっていう。
山本 同じじゃないですか
蓮見 とにかく安いんだよ。
山本 じゃあ食べにいきます？
斎藤 金ねーんだよ
山本 それは一緒ですよ。
斎藤 おごってくれよ、俳優
山本 やめてくださいよ。おれやってるのは、小劇場、ぜんぜん食えないやつですから。
斎藤 金にもなんないのになんで演劇つづけてんのよ
山本 理由なんてわすれちゃいましたね
斎藤 いまちよつとかつこよかった
山本 まじすか
斎藤 まあでも理由なく続けられるのが天職なんじゃないの
山本 そうっすね。
斎藤 こいつ演劇やってんだよ。知ってた？
蓮見 どうでもいいすね。
斎藤 どうでもいいって
山本 お二人はいま一緒の仕事なんですたっけ
斎藤 そうそうそう。今月から蓮見くんがうちの作業所で。ね。
蓮見 まじやってらんないっすよ、あんなの。ノイローゼになるよ

斎藤 ハガキのアンケートに当て名シールを張る仕事なんだけどね。

蓮見 だからおれもうすぐ辞めると思っています

斎藤 辞めてどうすんのよ。

蓮見 だからもうパチンコもやめて、競輪一本でいきます。

斎藤 浅いのよ 考えが。

蓮見 え、なんすか。斎藤さん、やります？まじで俺、力強いですけど大丈夫ですか

斎藤 もういいよ、やめてやめて。怖いから。

山本 はーあ。

斎藤 ：

山本 はーあ。

斎藤 なんか山本君、もしかして何かに憂いてる？

山本 わかります？

斎藤 うん、すつごくわかりやすい。

蓮見 なに山本君、病んでるの？

山本 うん病んでるし、憂いてる。

斎藤 ヘンゼルとグレーテル

蓮見 思った、俺も、それいま。

斎藤 うん思っただけじゃダメだから言わないと。

蓮見 えざるくなくいつか

山本 あの僕の話・・・

斎藤 あーなんだっけ山本君が美人局にカモられた話だっけ？

山本 うんそれは実際にありましたけれども。

蓮見 あれ何度聞いてもおもろいつすよね

山本 ちがくてちがくて、悩み、おれの。

斎藤 あー、え、なにに悩んでるのそんな

山本 いやだから。人生っていうか、この世界っていうか まあ 人生っすね

斎藤 三十路超えた演劇人っぽくていいね。

山本 ちよつともう、ちゃいますやん、年齢関係ないですやん、

斎藤 きーやめてその中途半端な関西弁

山本 いや。でも、お二人に話すような話じゃないですよ、人生の話なんで。

斎藤 失礼だよ、君。

蓮見 おれらに話してみればいいじゃない

山本 いや、なんというか。いま、彼女と同棲してるんですけど。

男として自分はいまどうなのかっていうか。あ、いや、ぼく結構古いタイプの人間で。それがずっと不安で。ぱっとしないというか。

先祖が村上海賊なんで。

斎藤 村上海賊？

山本 その末裔なんで。

斎藤 末裔？母方の？

山本 うーん。そのわりに イケていないというか。

斎藤 え、イケてた時代はあったの？

山本 あ、そうっすね。まあ一番イケてたのは小学校のときっすかね。

バレンタインデーにガチのチョコを3つ貰いました。

斎藤 すごいじゃん。まあよくみるとイケメンだもんえ

山本 そうなんですよ。ぼくよく見るとイケメンなんですよ。

ただ、中学ぐらいから、その、思春期というか自我が強くなってから 其の
ずっと自分が空回りをしている感じがするとか

斎藤 たしかにそういうところはあるね

蓮見 だから中学生みたいなんだ。

山本 そうだと思います。あとは、ナフサですかね。

斎藤 ナフサ？

山本 ナフサ。なんかやばいらしいじゃないですか。

斎藤 そうね。そうそうでも本当はヤバくないとかね。

山本 そうそうそう。え政治の話とかします？

蓮見 いい！いい！いいからやめて。

山本 そんなにつすか。なんかえ？

蓮見 冷めるから。

山本 あ、そうですか。まあとにかく、世界がなんかやばい感じがしている。

え、お二人はそういう人生のこととか世界のこととか考えないですか

斎藤 考えてる？

蓮見 なるようになるしかないんじゃないすか

斎藤 そうだね、おれの場合は、頼りない 流木につかまって生きているみたいだから。

山本 斎藤さんは昔は普通にはたらくてたんですね。

斎藤 そうね。割と大手の会社だったけど。休職して一回復帰して

すぐ給湯室のね 室長っていう仕事に回されて。

忍耐勝負っていう感じだったんだけど。負けて。それからすごいとこまで来ちゃったね。

山本 ああやっぱり普通にはたらくのは無理だな

斎藤 だからさ。あの。逆にさ。お店出すとかいいんじゃない？

山本 あくなるほど。たとえば

斎藤 パン屋とか。

山本 おれ！いや、一瞬、パン屋になりたいと思ったんすよ

斎藤 そうなんだ。

蓮見 金ないでしょ。

山本 ：カレーいきますか。

斎藤 そうね。

#2 善意

相原、有明、昆野は主任の帰りを待っている。問題が生じて、部長に呼ばれているのだ。
既に就業時間を過ぎ、2時間以上たっている。

昆野 結構かかってるね。

相原 そうですね。もう呼ばれてから2時間ぐらいたってますもんね

昆野 結構たいへんなのかもね

相原 そんな感じはありました、ちょっと具体的にはわからないんですけど

昆野 そうなんだ

相原 私達にも何かができればいいんですけどね。

有明 どういうことと呼ばれているか分からないから。何もできない。

昆野 私達にできることは、こうやって待つことぐらい。ね！

相原 そうですね！

昆野 もしかしたら私たちに関係ある何かかもしれないですしね。

相原 たしかに、たしかに。

昆野 だから待ちましょう。もう少しで来ますよ。

相原 そうですね。

昆野 相原さん、まだ出張旅費おわってないでしょ

相原 あ、そうでした、いまやります

昆野 就業時間すぎてるしいいよ、いいよ

相原 いやでも忘れちゃうので。

昆野 前のひとが結構デキトーだったからね。

川下さんとか注意したほうがいいよ。隙あらばタクシー使おうとするから。

相原 それ前に一回言ったことがあったんですけど。

なんかいろいろ言ってきたて論破されてしまった。

昆野 あのね。やばいって思わせるのも、あっちの策略だからね。

怖がらせて、ひとに気を使わせることで、自分のスペースを確保しようとする
ライフハックだか。そういうのに屈しちゃうないように気をつけないと。

相原 たしかに。

有明 みなさん今日予定とかないですか？

昆野 私は特に

相原 私は歯医者を予約していたのですが、今日は無理だなと思って断りました。

有明 大丈夫なんですか

相原 ちょっと虫歯がひどくなっていたんですが、

すぐにでもどうにかしたいという気持ちはあったのですが
主任の大変さに比べたら大したことはないので大丈夫です。

有明 そうなんですね。

昆野 そうだ、わたし、最近こういうのはじめて

相原 え、なんですか

昆野 セラピストっていうのかな、まあハンドマッサージが中心なんだけど

相原 ええ、副業っていうやつですか

昆野 まあそんな感じ、仕事おわりに学校に通って資格とって

どうにかこうにかここまでこぎつけたって感じ

相原 そういうの憧れますね。

有明 あの、帰ってもいいですか
相原 え

昆野 ん、え。ん、えっと、ん？

相原 もしかして何か大事な用事でもありました？

昆野 そっか、なるほど、ああ！

有明 いや、あの、とくには ないんですけど

昆野 え、っと、それは、ん？

有明 なんだろうって思っ

昆野 なんだろうっていうのは

有明 なんで待ってるのかなーって。

昆野 ああそっかそっか。えっと。

相原 いま、主任が部長に呼ばれていて、それで待ってるの。

有明 それはわかってるんですけど

昆野 えっとじゃ、え？え？

有明 その4人で待っていないと、開かない扉みたいなものがあれば、
待っていないといけないと思うんです
けど、そういう扉みたいなものは：ない

昆野 あるよ。

有明 あるの？

昆野 それが、仲間。

有明 仲間

相原 有明ちゃん、あの、自分が大変で帰ってきたら、
みんなに待っててくれたとら嬉しいっていう気持ちはわ
かる？

有明 それは、わかります

相原 そっか、そっか、そっか、ごめんね。それはわかるのね。

ちよっと認知のゆがみを確認がしたくて。

有明 認知のゆがみ？

相原 つまり、有明ちゃんは、自分の立場だったら分かるんだけど。

たとえば、主任が大変な状況から帰ってきて、

みんな待ってたら喜ぶだろうなっていうことが分から

分かります

相原 わかるのね。あ、ちよっとこれは複雑かもしれない。あ、だいじょうぶです。

有明 ほんとは帰りたいと思ってます？

相原 わたし？思っ

有明 ほんとは帰りたいと思っ

昆野 わたし？思っ

有明 思っ

昆野 有明ちゃん帰ってもいいよ。ほんとに、ぜんぜん、義務じゃないし。

みんなそれぞれ何が、正しいの

有明 ちゃんだったって、ちゃんと自分で考えて行動していいにきまつてるじゃない。
ただし？

昆野 ただしとかはないよ、ね。

有明 じゃ帰ります。

有明、荷物をまとめて出ていく。一同、顔を見合わせ。

昆野 え、びっくり。

奈月 え、そうですよね。

相原 わたしも、びっくりしちゃいました。

有明 なーんちゃって

といって顔をだし、有明がもどってくる。

昆野 も！ちよ、も、やだー有明ちゃん。

#正直

段田 えっと、つまり、どういうこと。

川下 えっと、その。

木崎 わが社の空気清浄機は、空気が、清浄されてないってことです。

段田 えっと、ちょっとよくわからないんだけど

川下 つまり、その取り込んだ空気が、配管の中をとり、フィルターのようなものを通して
そのまま出てるという。

木崎 ほんとにすごいのが、

入った空気とまったく同じ空気が出てる空気が出ることがデータとして分かりまして。

段田 ー。そっか。それは、ぜんぶ？

木崎 ぜんぶです

段田 ぜんぶ

川下 いや、正確には全部を確認できたわけではないんですけれども

段田 そうだね。ぜんぶを確認できるわけではないもんね。たしかに、たしかに。

木崎 ただ、出荷前の空気清浄機を現在確認しているところ、

確認したものは、ぜんぶ空気が清浄されていないという、確認されました。

段田 そうなんだ。それはぜんぶだね。

川下 ただ、出荷されたあとのものはまだ確認作業をできていないので、

その確認作業をおこなって1つも見つからなければ、

出荷前にギリギリ気づけたということになります？

段田 ならないね

川下 ならないよ。それは。木崎くん。

段田 なんで今のいままで気づかなかったかなあ

川下 すいません。

段田 だってお客様アンケートではずいぶん好評をいただいていたわけですよ。

川下 はい。中には、「おかげさまで肌がつやつやになった、息子の喘息が直った」など多数

段田 それ。なんだったのよ。

川下 なんだったんでしょうね。

段田　ちなみに、これは誰が気づいたの

木崎　僕です！

段田　あ、木崎くん。

木崎　はい。ぼく、こう見えて、結構神経質というか、

まあよく言えば、丁寧な仕事をする職人気質な性格なんです。

それで、少しでもお客様によりよい空気を届けられたらと思って、まずは現状確認をと思い、検査をしていましたら。あれ？と。

段田　それで川下くんは、どうしたらいいと思ってるの。

川下　まあその、何かこう、明るみに出てから、後手後手になるより、

わが社の社会的信用を保つためには、記者会見などを開き正直に公表すること

段田　はできないよね

川下　できないと思います。

段田　つぶれちゃうよ、うちの会社。こまったなー。なんてことを気づいてくれたんだよ君は。

木崎　え、ぼくがいけないんですか？

段田　いけないじゃないけども。

木崎　僕はいけなくないですよ

段田　いけないはないよ。いけないは、

川下　とにかく我々に残された道は、

段田　このことは一切なかったと思ひ込むしかないんじゃないですかね
そうだね。

川下　あれ、部長、いま、何の話してましたっけ。

段田　え、あ、ああ、わたしも、なんの話してたんだか忘れちゃったなあ

川下　いや、もう、この歳になるとダメですね。

段田　ほんと

川下　じゃ、また、思い出したらまた来ます。

段田　おおわかった。おつかれ。

木崎　え、あの、公表しないんですか

段田　なにを！

木崎　だから、空気清浄機から出てくる空気がまったく清浄されてないっていうことですよ
よりもよってこんな不器用な男が気づいてしまったばかりに

段田　木崎君。ちょっと、考えてほしいんだけど。

とりあえず、健康被害っていうのは今のところ確認はされてないわけだね。

木崎　はい。

段田　むしろ、お客様アンケートからみても、ご好評いただいている。

今となっては正直、理由はよくわからないんだけど、

むしろ健康の向上につながっていると言える。

それを。じつは、空気が入って出ていただけなんで言ったら、どうなる。

大混乱だよ。どうして私たちは健康になっていったんだ。そう思うだろう。

ママ、僕の喘息が直ったと思ったのは勘違いだったの。…っパン！

いま、小さな命が一つ消えたよ。

もちろん木崎くんとしても苦しいと思う。知ってしまったからには真実を伝えたい。それは極めて全うなことだよ。でもね。

真実を伝えること、常に正しいことだとは言えないことだってあるんだ。

その木崎くんの中の悩み、葛藤、罪悪感、そういったものから逃げたい。解放されたい。

そういう気持ちもわかる。私だってそうだ。でも。すべてはお客さんの健康のために。

その苦しみを共に背負って生きよう。そういうことを言っているんだよ。

木崎・・・ぼく、そんなことまで想像できていませんでした・・・。

この苦しみを共に背負っていきましょう。

陰口と約束

相原、大量のアンケートを運んでくる。それを処理していく。そこへ奈月がやってくる。

奈月 おつかれさまです

相原 あ、おつかれさま

奈月 なんかこの間、大変だったみたいっすね。

相原 あゝはい。

奈月 いや、正直、きついですよ。昆野さん、

相原 いや間違ってることは言っていないんですけどね

奈月 それがきつい、こっち何も言い返せないじゃないですか

相原 勉強になるっていうか、そんな感じですよ

奈月 えゝ相原さん、陰口とか嫌いですか

相原 え。ああまあ。そうですね。

奈月 ええでも、きつくないですか、影でも吐き出せなかったら、

いつか爆発しちゃいますよ、相原さん ばーんって

相原 ばーんって？そうかな

奈月 だいじょうぶですよ、まじで。わたし。

相原さんの悪いところ見てもなんとも思わないですし

それを裏で広めるとか言うベタな展開とかマジで糞ですから

相原 まあそうだな

奈月 おっ

相原 おっって。たのしんでるでしょ

奈月 まあちよつと

相原 ねー。

奈月 どうぞ真剣に聞くん。

相原 うん、その、正直、ちよつと緊張するようになったなあって、職場全体が

っていうのはあるなあって思うよね。

奈月、グッドポーズ

相原 なに

奈月 ほんとそう委縮してるよね、みんな。

相原 そう女帝っていうか。あ、私ほんと悪口という言わないだけど

その：：昆野さんがいなくなるとスーっとするの

ずっと鳴っていた換気扇を消したときにスーっとなるみたいな感じで。

そういうときね、このままいなくなってしまうばいいのって思うんだよね

あ、ごめん、なんか私の中のドグマが漏れ出ちゃったみたい。

奈月 相原さん、いますごく生き生きしてるよ

相原 え、うそ。そう？ いやまあ今までがすごく緩かったっていうか、

背筋が伸びるっていうかそうなのかもしれないけど。

奈月 うん。

相原 わたしが、いやほんと、昆野さんの立場になったらっていうか、

奈月 え、管理職とか考えてるの？

相原 いや全然そんなことは思っていないんだけど

安心で風通しのいい職場にしたいなって思ったりはした。

奈月 そうだよな。ほんと。わたしもそう思う。

相原 ちよっと、私の前にたってもらっている？

奈月 え、ここ

相原 反対。

奈月 ああ。え、なになに

相原 今からやるのは信頼のエチュードっていうんだけど。

わたしは貴方のことを絶対に支えるから信頼してまっすぐ後ろに倒れてみて

奈月 わかった。

相原 せーの。

奈月 ふー！

二人、笑う

相原 こんどはもう少し下で止めるからね

奈月 せーの。

相原 どう。

奈月 たのしい。

相原 やったー。こういうのをいつか研修でやりたいの。

奈月 えーすごいいいじゃん。どっかで勉強したの？

相原 大学が一応そういう関係の大学で。

奈月 へえそうなんだ。すごいね。え、今度の会議で提案してみたらいいじゃん。

相原 え？ 今度の？ むりだよ。

相原 だめもと！ わたしはぜったいいいと思うし。いまの職場に必要な研修だと思う。

相原 そうだよな。

奈月 そうだよ。

相原 がーんばるー

奈月 よし。じゃあ、帰る？

相原 ああ。

奈月 え、なにまだなんかあるの

相原 これが

奈月 アンケート

相原 ぜんぶ手集計で。ぜんぜん終わってなくてまじでやばいです。
奈月 にやるほど。

＊間違った相手

善方 え、と、今の彼氏との出会いの話をしたいと思います

初めて彼と出会ったのは、わたしが高1で、彼が高3で。

演劇部だったんですけど、演劇部の先輩で。演劇部で最初に出会いました。
はじめてあったときにスゴイかつこいいなって思っ

演劇の基本練習で、感情解放っていうのがあるんですけど

それももうすごくて。なかなか話しかけることができなかったんですけど

新入生のオリエンのときに話しかけて

山本 サカナクションおれめっちゃ好きだよ

善方 っ、サカナクションの話でめっちゃ盛り上がって。

それから気さくにかけてくれるようになったんですけ

3年生の6月になると引退で

それでも先輩は部活の様子をたびたび見にきてくれて

受験期も本格的になって、ほとんど部活に顔出さなくなっ

てああ高校卒業したら、あえなくなるんだなって、考えてい

この気持ちは、好きってことなのかもしれないって思っ

彼に告白することにしたんです

山本 結構寒いね。

善方 そうですね。

山本 なんの話。

善方 ああ。あの、先輩大学って、東京にいつちやうんですよね

山本 あ、きいちゃった

善方 はい。聞いちゃいました。

山本 もうちょつと演劇やりたくて。

第一志望は早稲田、第二希望は日大、滑り止めは和光、桐朋芸大を考えてる。

善方 先輩役者めざしてるんですもんね

山本 そうね。演劇が俺の世界を変えてくれたから

今度は俺が、演劇で世界を変えたいと思っ

善方 きゅん

山本 ん？どした？

善方 あの、先輩が東京にいつちやうの、スゴイ寂しくて

それで気づいちゃったんですけど

わたし、先輩のこと、好きです

もしよかったら、付き合ってくれませんか

山本 おれでいいの

善方 先輩がいいんです。

山本 あ、そっか。うん。おれでよかったです

善方　お願いします。

こうして私と彼は付き合うことになりました

先輩は結局、東京の大学に進学し

わたしも追うように東京の大学にいき

わたしも、大学は違うんですけど演劇サークルに入って

一緒にいろんの劇を見に行ったりして。

山本　いやー。

善方　いやーすごい

山本　すごい・・・。

善方　大学の4期間はあつという間に過ぎて行つて。

で、卒業を時期に同棲をはじめました。

それで彼は就職はせずに、役者としてがんばっていくことになって。

私も、就職せずに演劇をするんですけど。ある程度の採算はとれているというか。

演劇系アイドル、みたいなものをしていまして。

昆野　へえそうなんだ。

善方　それがどうなのかっていうのをもうひとはたくさんいると思うんですけど。

演劇で食べていくっていうことは

こういうこともしなきゃいけないんじゃないかなって思っていて。

でも彼はそれが不満みたいです。なんか自分が幸せにしたい、みたいな意志がすごくて。

え、でもいいじゃないですか

善方　ただ行動が伴っていないんですよ。

昆野　ああそっちな。

善方　自分が主人公っていうか。常にそういう感じで、

すこし冷めてきちゃった？

善方　うーん、でも、好きなんです、ずっと一緒にいたいなのは思ってます

昆野　もう、ノロケじゃない。

善方　ええ　そうですか？

昆野　じゃつぎ左手いきますねー

善方　あ、はい。

昆野　痛かったらいつてくださいね。呼吸して。吸って。吐いて。ふー。

もう一回いきますね。はい、吸って、吐いて、ふー。

うん、結構いますごくいい状態になったから変わったと思うよ

善方　えーすごい。

昆野　でしょ？

善方　え、昆野さんって傾聴力高いですよ

昆野　えーまあそれもスキルみたいなものだからね

善方　バイト先の上司とかめっちゃくそで

えー昆野さん上司だったためっちゃいいな。

昆野　えーそうですか、うれしい。

善方　え、昆野さんは愛ってなんだと思います。

昆野 えゝ。ことばにするのは難しいな
そういうことを言語化しようとするから混乱するんだと思う。
善方 でもやっぱり不安じゃないですか
昆野 そうね。まああえていうのならば
疲れたときにそつと寄り添いたいと思うことかな。
善方 なるほど

第2場

#相違

斎藤が公園にやってくる。上方に何かをみつける。そこへ蓮見がやってくる。

蓮見 あ、どうしたんですか。斎藤さん。

斎藤 あれさ

蓮見 あれ。

斎藤 あれ。カラスの巣じゃね

蓮見 どうしてわかるんすか、カラスいないのに

斎藤 あれカラスの巣だよ、カラスの巣だよ

蓮見 こんなところに巣をつくるんすね

斎藤 カラスの巣はよくないんだよ。

蓮見 そうなんすか。

斎藤 あ、きた。

カラスが巣にやってくる。

斎藤 カー

蓮見 なにしてるんすか。

斎藤 敵意がないことを示そうと思って。

蓮見 あゝ、そうなんですね。ぼくもやったほうがいいですか

斎藤 だいじゅうぶ、だいじゅうぶ。それは。へたにやると。あれだから。カー。

蓮見 カラスってカーってなくカラス、うえおんって泣くカラスもいるんだよ

斎藤 へえそうなんだ、くわしいね

蓮見 youtubeでやってて。

斎藤 へえ。

蓮見 今日、暑いっすね。

斎藤 あーそうね。

蓮見 なんか喉かわかないっすか？

斎藤 この前聞いたんだけどさ、喉乾いたって思ったときにはもうすでに脱水症状なんだって

蓮見 え、じゃあ、おれいま脱水症状っていうこと？

斎藤 そういうことになるね

蓮見 こわ。 え、じゃあ、喉乾いたときにはもう脱水症状っていうことでしょ。

斎藤 おなじこといってるけども

蓮見 こわ。 え。ほかにもそういうのあります？

斎藤 だからさ。その人のことを目で追い始めたら、もう好きってことだよ。

蓮見 好きなひととかいるんですか

斎藤 え？んー。

蓮見 え。まじすか。

斎藤 好きっていうか。その。

蓮見 きも。

斎藤 おまえが言うなよ

蓮見 おまえこそ言うなよ。

二人 そりゃそうだ。ははは。

斎藤 ていうか最近、職場で見たくない？

蓮見 ああ、シールはりっすか。辞めました。

斎藤 やめたの？

蓮見 頭おかしくなっちゃいますよ、あんなの。

斎藤 なんだよ。せっかく紹介してあげたのに。

蓮見 あんな仕事つづけてられますね

斎藤 このあいださ、機械が1台だけ入って、ぼくがピリピリピリってやっているところ、

もうパン・ペタン・スー、パン・ペタン・スーって言って、もう負けないように必死よ。

蓮見 それ斎藤さん雇う意味ありますか？

斎藤 ないよ

蓮見 そうっすよね。

斎藤 だからうちらなんか、国がちよつとでも方針変わったら、すぐに死んじゃうん。

障害者支援金という、鎧に守られてるからどうにか生きてるけど。

蓮見 斎藤さん、何級でしたっけ

斎藤 おれ、3級

蓮見 おれも3級

二人 いえい。

斎藤 あ、そうなの。

蓮見 そうっすそうっす。

斎藤 いや、あんなさ。美術館とかただになっただけしょうがない、でしょ。

蓮見 そうっすか。おれ、全然使いますけど。

斎藤 そうなの

蓮見 あれ、付き添いも安くなるじゃないですか、だから友達つれて、よくいきますけど。

斎藤 ともだちいるの

蓮見 え、いますけど。え、もしかして、ともだちいないんすか？

斎藤 え、ここは？

蓮見 え、でもここでいっても仕方なくないですか、すでに割り引かれてるのに。

斎藤 そうね。

斎藤 そうなんだ。え、じゃ電車とかの割引も使ってるの？

蓮見 使ってますよ、そりゃあ

斎藤 そうなんだ。おれ、全然つかってない。

蓮見 だって使わなきゃ損じゃないですか？

斉藤 そっか、おれはなんか、だから、そういうの使うのが嫌っていうか。

なんだろ。いま働いて金稼いでるからさ、別に使う必要もないかなって

蓮見 えーそうなんすね

いやぼくは、もうずっと損してるんだから。少しでも取り返さなきゃって感じですよ。

斉藤 あ、そういう感じなんだ。

蓮見 だから斉藤さんと違って、クズなんですよ。ぼくは。

斉藤 じゃあ、最近、仕事しないで、何してるの

蓮見 やばいっすよ。朝おきて、また寝て、気づいたら昼過ぎで。メシ食って寝てます。

斉藤 ひきこもりじゃん

蓮見 そ、ひきこもり。

斉藤 親とかはなんか言わないの？

蓮見 言わない、というかわせないっすね。そんなの。

斉藤 え、なに、あんま親とうまくいってないの。

蓮見 いってないっていうか。まあそうっすね。だって別に言う権利なくないっすか。

斉藤 あんまそういうこと言うなよ。

蓮見 仕方ないじゃないですか 思ってるんだから。

斉藤 そうだけど。

蓮見 だから斉藤さんは光属性で僕は闇属性っていうただそれだけですから。

斉藤 え、ぼくら、いつか融合する？ファアアって

蓮見 は？

斉藤 ！

蓮見 ぼく双子の兄貴がいたらいいんですよ。で、生まれてくるときに、兄貴が死んで

僕だけが生まれてきたんです。双子ってそもそも脳性麻痺になる可能性が高いらしくて。

でもなんで兄貴じゃなくてぼくだったんですかね。

斉藤 ！カレー食いにいくか

正す

有明 お先に失礼しまーす。

昆野 有明さん、ちょっとお話いいですか

昆野 ごめんね帰るところで

この間のさ、段田さんが上によばれて3時間ぐらいかえって

あのとき有明さんだけ結局、先に帰ったじゃん。

有明 はい。結局かえりました

昆野 え、あの、具合が悪いとかじゃないけど、帰りがかった？

有明 はい、帰りがかったから帰りました

昆野 この間のランチとかのときも、途中で席たって、

もどってこなくて会社に先にかえっちゃったじゃん

びっくりしちゃって

先にかえるんだったら、なんかあったらよかったのかなって

有明 うーん・・・あ思い出しました。

昆野 ジョナサンで子どもの話とかエイジングケアの話とかしていたときですよ
ちよっと言った方がいいのかなっておもって。

有明 あー・・・すいません、こどもの話とかエイジングケアの話とか全く興味がなくて
その。なんていんだらう。みんなに合わせるんじゃないんだけど

昆野 協調性みたいな部分

有明 あー。

昆野 気を使ってくれたらもうちよつといいのかなっておもう

有明 ・・・・

昆野 どうですかね

有明 その、帰らないほうがよかった・・・

昆野 端的にいったらそうなっちゃうんだけど

有明 あーそうですね。帰らないほうがいい

昆野 帰らないほうがいいね。

有明 あ・・・

昆野 だいじょうぶそう？

有明 だいじょうぶ？だいじょうぶというのは？

昆野 ああいうときに、帰らないっていうこと

有明 社内規定的に？

昆野 社内規定ではないけど

有明 社内規定ではない・・・？

昆野 ・・・・

有明 あそれは段田さんがなんかおっしゃってたんですか

昆野 そうかえってきたとき、1つだけ椅子あいていて
寂しそう

昆野 段田さんも優しいから言及はしなかったけど

有明 たしかに1つあいていたら帰っていたってなりますよね

有明 段田さんが怒ってたりとかは

昆野 怒ったりとかはしてないけど

有明 段田さんは怒ってない・・・？

昆野 ・・・・

有明 じゃ帰りますね。

昆野 そのこういうときに帰らない

有明 あー、そうかそういうことか、あー。

昆野 すごく素直なところ、すごいんだけど、
社会と一緒に生活していくにあたって、難しいかな、難しいというか
他にもこれからあるかもしれないじゃん。待っていなぎやいけないときとか
有明さんにも今後一緒にいてくれればいいなって思うんだけど

昆野 まあでも残業代とかもでないから

有明 そうですよ

昆野 そうだけど

有明 ほんとは帰ってたかったですか？

昆野 わりと帰らないとのがあたりまえだから、

でも、自分のあたりまえが当たり前じゃないから

有明 そうですよ

昆野 でも会社とかになると、正しいことだけが正解じゃない

有明 あゝ

昆野 わかるかな

有明 正しいことだけが正解じゃない・・・

昆野 なんだろう チームで仕事してるわけじゃん

有明 そっちが正しいっていうことですか

昆野 ハンターハンター読んでる？

タワーの囚人たちと戦うとき、トリックタワーの第三次試験の多数決の問題で
みんなで困難なみちが、ひとりで困難な道が、で、ゴンは何を選んだかわかる

有明 みんなで困難

昆野 そう、そういうこと

有明 ああ・・・

この部屋熱いつすね。

#真実

木崎 ビオレさん

山本 ああ、はい、ビオレです

木崎 ああ、よかった会えて。

山本 なんかついせん、わざわざ

木崎 いやこちらこそありがたいです

山本 ・・・・

木崎 ここはすこしあれなので話せる場所にでもいきましようか。

山本 あ、はい。

木崎 都会にもまだこんなに自然が残っているところがあるんですよ ビオトープ

ここにも小さな地球が

木崎 えっと。

山本 ぼくも、なんかおかしいなと思ってたんです。

それで自分なりに色々しらべていたときに、黒豆さんの記事を偶然みつけて
それでぜひお話を聞いてみたいっておもったんです。

木崎 ビオレさん・・・ありがとう。一応、確認なんだけど

聞いてしまったら後戻りできなくなるけど大丈夫。

山本 だいじょうぶです

木崎 じゃあ、話すね。もう結構前になるけどさ。世界的にウイルスが蔓延したじゃない
でそのときさ。国が全家庭に一律一万円で空気清浄機を支給したじゃない。

すっごいでっかい空気工場も作って。

で。そのおかげで如実にパンデミックがおさまっていった。

おさったあともしつなんどきまたそういうことが起きるかもしれないっていうことでこの国の各家庭に空気清浄機がおくことになったわけでしょ。

で、ぼくエンジニアだったわけね、それで空気清浄機には国から支給されウイルスを除去する特別なフィルターが入っているんだけどその、フィルターの触媒っていうのがよくわからなくて、自分のもとはたらいでいら会社で、目に見えないものをどれだけ除去しているかわかる装置で確かめてみたんだよ。そしたら、入る空気と出る空気が同じなんだよ。入る空気と出る空気がおなじ？

山本 だから空気は入って出ていただけってそういうこと。

山本 そしたらどうしてパンデミックはおさまったんですか

木崎 わからない。おそらく、治った気になっていたら 治った。

ということじゃないかと私は考えている。

山本 でも。

木崎 なんでワクチンより先に、空気清浄機を支給したのか。だよな？

だから国は分かっていたんだよ。パンデミックがおきるっていうことを

いやむしろ、実際にはそもそもパンデミックなんてものはなかった

感染にかかったつもりになることで 感染させていた。

山本 つまり、感染してなかったのに感染したつもりになっていて

その感染が治ったつもりになっていた。つまり何もおきていなかったということですか

木崎 いや 違って。感染はしていたの。感染したつもりになることで。

山本 ん？えっと。どういうことですか

木崎 とにかく、そうやってパンデミックは人工的におこされた、空気清浄機を支給するために。

山本 ・・・その空気清浄機で政府は何をしようとしているんですか

木崎 空気を操ろうとしている。

山本 そうだったんだ。

木崎 知ってどう思った？

山本 そう考えると

木崎 何か思い当たるところが

山本 僕がしゃべると、何言ってるんだっていう感じになるんです

木崎 それもです。

山本 これも？

木崎 空気の正常化です。

山本 空気の、正常化？

木崎 窓をあけてはいけません。新しい空気は変革を与え、変革は基盤を揺るがす。

故に、基盤の上に立つ者たちは、まじめな行動、を不規則発言とのしり

滑稽なものへと変換する。真理すらも、陰謀論に変えていく。

山本 そうだったのか、・・・クソ！

木崎 あまり大きな声を出さないほうがいい。

山本 すいません。・・・でも。ずっと苦しかったんです。

木崎 僕がしゃべると、なんか変な空気になるって、ずっと思っていて僕もです。

山本 黒豆さんも？

木崎 だからビオレさんの気持ちがすごく分かります

ただ、純粹に。率直にしゃべることが、なぜこんなにも難しいのか。

山本 そんなにも息苦しいのか。これはあたりまえではない。この国、特有のなんかなのです。そもそもきれいな空気ってなんなんでしょう。

木崎 そうですね。ぜったいに山の中のほうが、キレイに決まってる。

それをなぜ、きれいな空気って設定自体を誰かに決められなければいけないのか。一体、だれの物差しでやってるだ！この国のなんかだよ。

山本 そうだななかだ！

木崎 この国を変えましょう。僕らならできる。

#推し

善方 ありがとうございます

斎藤、遠くで手を振る

斉藤 あのこれ エクレア

善方 え、うれしい、ありがとうございます。

斉藤 ああのチエキ券も10枚 買つていたから。

善方 そうなんですか。嬉しいです。

斉藤 いや。いままであんまり見てない役で。今回はあれ？あてがき？

善方 ああ一応。オーディションうけて、それから脚本の方がはい。

斉藤 そうなんだ。脚本と演出家は同じ方なんだよね。

いや。殺陣とかにもはじめて挑戦して

ダンスももちろんすごかったんだけど。

その見て 舞台上でこう窮屈そうだなって。

ムリしてるなって。それは善ちゃんが悪いとかじゃないんだけど

上演台本も買ったから見えてみるけど

一生懸命ね演出家さんの意図をかって

演出さんの中だけで演じようと頑張っているんだけど

もつと善ちゃんのはのびのびやったほうが

演出家さんとはコミュニケーションとれてた？

聞いてもらえた？

善方 あ、でも何個か、わたしの意見が採用されて。はい

斉藤 このカンパニーははじめてだよ

善方 そうですね

斉藤 あんまりそうだね

今回出演できたのはおめでとうなんだけど

演出家さん、ああ。あんまり聞いたことない演出家さんだけど、経験が浅いのかな
ほんと売っていきなきゃいけない時期だから

自分の意図とは関係ない舞台も出なきゃいけないのも分かるんだけど。
将来的にはシアターコクーンとかに出る役者さんだと僕は思ってるしね。

善方

あ、はい。いま行きます。すいません、もう舞台集みたいです。

斉藤

ああそっかそっか。ソアレまでそうか。ちょっと押してたもんね。

上演時間90分って書いてあったけど、100分だったもんね。

善方

すいません。

斉藤

いや。こういうことしかできないからさ

今回の劇は心に負担のかかるシーンもあるからさ

メンタルケアだけは気をつけて

なんかそういうことあったらいつでもDMして。

夜なんかひつようなものがあつたらもってくるから、

ビタミン系だよね、レモンのね

また 二時間くらいに

がんばって

とりあえずおつかれさまでした

がんばって。

善方

ありがとうございます

#風通しのよい職場

段田

相原さん、アンケート集計おつかれさまでした

特段クレームのようなものありませんし、

概ね好評いただいているようなんで良かったんじゃないですかね。

相原

そうですね。

段田

これなんて見て「おかげさまでお肌ツヤツヤ、エイジングケアもばっちりです」って。

昆野

うれしいですね。

段田

いやあほんとに。

じゃ特になければ、会議はここらへんでということ、おつかれさまでした。

相原

あ。

段田

どうした相原くん。

相原

いや。えっと。ごめんなさい、ちょっと何言おうとしたか忘れちゃいました。

段田

なにに。なんでも言ってるね。ざっくばらんにね。

奈月

あの、ちょっと、私の方から1つ提案がありました

段田

おおおなにに。

奈月

お客さんアンケートなんですけど。いま、紙アンケートでやっていると思うんですけど

WEBアンケートに変更できないですかね。

段田

それは、なんで？

奈月

WEBならいまやってる集計ぐらいだったら勝手にやってくれますし

効率的かなと思います

段田

あれ、昆野さんだね、前のアンケート担当は

昆野

そうです

昆野 言ってなかったの？

昆野 すいません、ひきつぎがうまくいってなくて。

段々 まあこれは何度か実はあがっている話なんだけど

結論から言えばムリっていう話なんだよね。

奈月 なんですか

段田 まず全社としてね、紙のアンケートっていうことになっているわけだから一社だけそういうふうに変えたらさ、

整合性がつかなくなつてアンケートとしてを意味をなさなくなるでしょ

それを変えようと思うと、これもう全国的な話にもなってくるわけだから、それは現実的には不可能っていうことになるよね。

奈月 いやでも、WEBのアンケートをつくるのなんで簡単ですし、

メールで送ればハガキと違ってコストだって抑えられますし

ただ紙のアンケートを無くすっていうだけなんです

別にすぐに全国的にもすぐにできちゃうと思うんですけど

昆野 あだね。システムを変えるつてのはそんなに簡単じゃないんだよね。

ひとつ変えたら、別のことも変えないといけないし、

そしたら今度はこれも変えないといけないって、こんなことやってたらもうもうサクラダファミリアになっちゃうから。

奈月 でも。実際、紙でやる意味ってなくないですか？

昆野 うんあのね、会社は、なんの意味もなく紙のアンケートにしてるっていうわけじゃないの

奈月 じゃあ。どういう意味があるんですか

段田 それはいろいろあるんだけど、まず

昆野 ぬくもりね。

段田 そうぬくもり。

奈月 なんですか、ぬくもりって。

昆野 わたしも相原さんの前のアンケートの担当だったから分かるんだけどね。

手書きで書かれたことば一つ一つからお客さまの心を感じることができるの。

奈月 ごめんなさい、それ必要ですか。

昆野 え、なに、どういうこと 全然わかんないんだけど。必要って？必要でしょ。

段田 奈月くん。それはないよ。わたしたちが相手をしているのは数字じゃないの

ひとでしょ。だから常にお客様に対して誠実に向かい合わないよ。

奈月 それは分かりますよ。でも。それとこれとはあまり関係ないんじゃないですかね。

昆野 え。じゃなに。奈月さんは、わたしが、わたしがね、今までやっていたことは、まったく、

まったく意味がなかったっていうことを言いたいのか？

奈月 え、自分がやっていたことが意味がなかったと思うのが嫌だから言ってるんですか

昆野 わたし、いまでもんそういうこと言っていないよね。言ってた？段田さん

段田 ごめんなさい、いま、ちょっと別のことを考えていて。

昆野 相原さんは、聞きたいまの

相原 わたし？

昆野 言ってた、わたし、そういうこと？

相原 どうでしょう

昆野 は？ いったくないでしょ。

奈月 言ってみましたよ。

段田 まあまあ昆野さんが大事にしていたぬくもりっていうものもちろん大事なんだけど。

それ以外にも紙である理由はあるの。

奈月 なんですか

段田 だから、ひとつはね、お客さまの中にはお年寄りだっているわけだからみんながみんな奈月さんみたいに、WEBで答えられるというわけでもないし。

奈月 でも、紙だからめんどくさくて答えないっていうひとだっていっぱいいると思いますよ。

昆野 じゃあはがきでしか答えられないひとを意見はきかなくていいっていうこと

奈月 そういうことを言ってるんではなくて

昆野 そういうことを言ってるよ。弱者に対して耳に傾けないって。

奈月 じゃあ、スマホをもっていないひとってどれだけいるんですか

昆野 いるわよ、それはいっぱい。ね。

奈月 いっぱいってどのくらいですか。

昆野 うちの死んだおなあちゃんだって持ってたし。

奈月 もう死んでるじゃないですか。

段田 はなしを最後まで聞いて。あと、アンケートに使われているハガキ。これ。

奈月 それがどうしたんですか。

段田 これ、うちがどこから買い上げているかわかる？

身体に障害をもっている方が働く、うちの特例子会社。

これをすべてWEBでのアンケートに変えたらこのひとたちどうなるよ。

そういう社会貢献としての意味もあるの。

奈月 でも結局それだって支援金目当てなだけですよね。

段田 奈月くん。

奈月 いや。わかりますよ。社会貢献の意味は

段田 ぜんぜんわかってないよ

奈月 でも unnecessaryなものにコストをかけるんだったら

昆野 不必要！？ いま必要っていいましたよね

奈月 もっと意味のある仕事をやってもらったほうが効率的じゃないですか。

段田 僕はその効率重視っていう考え方好きじゃないな、極めて資本主義的だ

奈月 好き嫌いではなくて、何が正しいかじゃないんですか

段田 やめよう。ね。もう、お互い、ヒートアップしちゃってるから

奈月 逃げるんですか

段田 もうこなかったら建設的な話なんのできないんだから

奈月 逃げないでくださいよ、なんで最後まで話を聞いてくれないんじや

段田 聞くよ、だから一回冷静になろうよ。

奈月 わたしは全然感情的になってないですけど。

段田 だから感情になるのはやめようって！

相原 あの・・・、ハガキにQRコードを載せて送るっていうのはどうでしょうか

奈月 それハガキのコストかかってますよね

相原 ごめんなさい、そうですね。なんか場違いなことしちゃった。すいません。

昆野 でもほら集計の時間は抑えられますし、いいんじゃないですか

奈月 え、ぬくもりは？

段田 たしかに特定子会社の方たちへの支援もできるし うん、ナイスアイデア

相原 そうですかね。

有明 へ！

#

段田 あ、もしもし。週末？ああうん。わかった。車だす、車だす。

あそうだ。ついで行くとき母さんとこ寄っていくか？

なあ。途中でスイートポテトでも買って行って。

いいって。お前、母さんお前の顔見ただけで喜ぶからさ。

いや、わかってるんだって。…ん、まあじゃあまた今度でもいいけども。

なに？2万？ペイペイ？んーまあいいけどもいや。最近、使いすぎじゃないのか。

いやダメとはいってないけども。だからダメとはいってないでしょ。

ペイペイな。うん、わかったよ。…きれてる。ったく。…ペイピイ♪…はあ

段田は腰を押え、仕事に戻る

#正しいことをしても意味はないかもしれない

公園、ベンチ、座っている奈月、そこに蓮見が現れる。カラスの巣を見ている。

となりにする。カラスの巣をみている。奈月をみる。再び、カラスの巣をみる。

蓮見 カラスがいるんですよ

蓮見 見る、微笑む、舌打ちをする

奈月 え、ここダメでしたか

蓮見 ぜんぜん大丈夫。ただいつなにあるかわからないからそれだけは覚悟しといて

奈月 はい。

蓮見、奈月を眺める

蓮見 え。なんかあった

奈月 え？

蓮見すごい暗い顔をしている

奈月 仕事やすんで散歩してて

蓮見 あー。いいね。

奈月 いいですかね
蓮見 ……
奈月 なにやられてるんですか
蓮見 パトロールです
奈月 パトロール？
蓮見 ああこの辺に住んでいて
奈月 仕事はしてないんですか？
蓮見 パトロール してる
奈月 ああ すいません
蓮見 休みの日とかないからね
奈月 ほら、カラスがいるから、子どもがあぶないから
パトロールして疲れることないですか
蓮見 あるよそりゃ。
奈月 どんときですか
蓮見 いや、クソガキが、指さしてくるやつがいるわけ、それは傷つくし。疲れるよ。
奈月 そういときどうするんですか
蓮見 え。おどす。で。わからなければ。ぶん殴る。
奈月 やばいっすね。
蓮見 お姉さんはどんなお仕事なの
奈月 仕事は事務ですね、
蓮見 あたま、いいんすね
奈月 べつにそういうわけじゃないですけど
蓮見 いや、あたま いいだよ。
奈月 今日、はじめて仕事やすんで…
蓮見 体調が悪いんですか
奈月 なんか疲れたな〜と思って
蓮見 いやあるよね、疲れることあるよね。ぼくも働いてた時があったから。
職場でさ。亀を買ってたのね。
奈月 亀？
蓮見 社長の亀を。それを上司が育ててたんだけど。
奈月 その上司がさ、亀の飼育とか押し付けてきて、業務外で。
パワハラですね
蓮見 パワハラっていうか。あゝまあパワハラか。
奈月 まあその上司も頭がおかしかったからみんなからウトまれてたんだけど。
でもさすがに僕も何をやってるんだろうと思ってやめて、10年
奈月 10年無職なんですか
蓮見 そうね。
奈月 なんか感じなんですか。無職って。
蓮見 無、だよ。
奈月 無？

蓮見 無はね。おそろしいよ。無だからね、無。どこにもつかまるところがないのよ。ただまあそれも こういうものかと思えば安定して。

そこで、ある種の完結を迎える。

奈月 なるほど。

蓮見 深淵からごきげんよう。

奈月 ・ ・ ・ 今の会社のままじゃよくないとおもって意見をいったんですけど。

蓮見 ぜんぜん求められてないんだなって思っ。なんか疲れちゃって。

奈月 なるほど

奈月 なんかにただ変えたがってるだけとか言われて。そんなことするわけじゃないじゃないですか。

蓮見 ・ ・ ・

奈月 皆勤だったんですよ、わたし。小学校からずっと。

多少の風邪でも無理していたりしたのに

はじめて休んじやいました。風邪でもないのに。

罪悪感がすごくて、考えなくてもいいのに明日はどうしようとか

仕事のことばかり考えちゃって。つまらん人間ですわ。わたしは。

蓮見 そういうときの、おすすめの過ごし方はですね 昼過ぎにおきて、酒飲むわけ。

そんで下準備ができるわけ、大宴会の。

そんで17時くらになったらあいていそうな友達にかたっぱしに電話するの

今日の飲みにかかないって言うのシンプルに、警戒されないように

奈月 え、わたしそういうの苦手なんですよね。だれか出てくれるかな。

蓮見 だいじょうぶ意外にいるから暇なやつが

奈月 えゝ緊張しますね。

蓮見 いいのよ。そんなん。だめもとなんだから。

奈月 じゃやってみます。

#真面目

奈月 おつー。

相原 もー。心配した。いやびっくりしたよ突然電話くれるから

奈月 ごめん仕事中だったよね、あは

相原 今日体調悪かったんじゃないの？

奈月 あゝ仮病っす。

相原 えゝそうだったんだ。

奈月 とりあえず、酒が飲みたくて。

相原 木崎さんも来るんだよね。

奈月 そう、後から。

奈月 じゃ生で。

相原 じゃあ私も。

木崎 あ、おつおつおつ。どうもー。

奈月 あ、お久しぶりですー。

木崎 ごめんね、おそくなっちゃって。

相原 木崎さん、生でいいですか？

木崎 あ、ぼく、ごめん、お酒弱いんで。コーン茶ってあります？

相原 コーン茶ですか？ないですね

木崎 じゃ大丈夫です。え。今日はなんかこういう女子会に、

こんな僕のようなものがお呼ばれしてしまい、ありがとうございます。

相原 え、つながりあったんですか？

奈月 あ。1年目のときとかに、いろいろ気にかけてもらって

木崎 まあまあそうっすね。

相原 へえそうなんですね、え、ていうか木崎さん仕事やめたんですよね。

木崎 あ、そうね。まあまあまあ。でもまあいまは転職とか普通な時代だからね。

奈月 え、木崎さんは仕事やめて何してるんですか

木崎 ああそのまあ慈善活動みたいな、その、詳しくはあれなんだけど。

奈月 みんなで集まって語り合うみたいなさういうのをやってる。

木崎 え。そうなんです。対話型のイベントみたいな、場づくりみたいな。

相原 まあまあそういう感じの。

奈月 へえいいですね。

木崎 え、興味ある？

奈月 えっと興味は…ないですけど。

木崎 ないんかい

奈月 いやでもちよつと仕事をどうしよつかなって思ってた。

木崎 え。そうなの。

相原 え。どしたとした

奈月 ちよつちね。

相原 まあ疲れるよね。

奈月 そうなんだよ。なんというか。いや、諦めればいいんだけど。信じたくなっちゃうんだよね。話したらきつともっと良くなるって。別に私の正解を押し付けてるつもりはまったく

ないんだけどさ。このほうがいいなって分かればさ、そうしようとするもんだって。それ

ってあたりまえのことだと思っただけ。そうしないひと、できないひと、がいっぱい

いて。プライドなのかな、私の言い方がプライドを刺激しちゃうのかな。わからないけど。

でも違うじゃん。そういんじゃないくてさ。良いものはよいんだからさ、そうあるためには

どうしたらいいかを考えればいいのに。はあでも疲れちゃうよね。疲れちゃうんだよ。だ

から私は疲れちゃったわけだし。そういうのを押し付けるのがよくなかったんだよね。わ

かっている。」

相原 そうだね。だから。奈月は、真面目だから苦しんだよね。

私なんか妥協しつぱなしだから。それがいいとかでは全然ないんだけど。

でもしょうがないっていうか。だから奈月もしかしたら

真面目すぎるのかもしれない。

だからちよつと不真面目になるくらいでいいんだよ、たぶん。

奈月 うーん。そっかあ。そうなのかもね。

木崎 ：そうなのかな。だって、そんなことは奈月さんも分かってるけど

それでもそうなるってしまうってことは、その真面目は

奈月さんにとって必要最低限の真面目なわけだから。

「真面目すぎる」って、ちょっと無責任だと俺は思うけど

あ、ごめんなさい。相原さんを責めているというわけではないんだけど。

相原 いやでも、私にとって同期の奈月っちは、すごい大切な存在で、

だからやめてほしくなくて、少しでもキモチを楽に仕事をできたらなって思ってただけなんですけど。

木崎 だからそんなこと言ったって楽にならないって言うてるの。

相原 なんてそんなことわかるんですか

木崎 わかるもん。え、ちなみに相原さんって、鬱になったことある

相原 ありますよ。

木崎 薬とか飲むぐらいのやつだよ。

相原 それはいいですけど

木崎 それはね鬱って言わない。ただ落ち込んでるっていうの。

相原 知らないですけど

木崎 あるからおれは。だから分かるから。

相原 なんなんですかその鬱マウント

木崎 マウントじゃなくて、俺は分かるって言うてるの。

相原 え、じゃあ木崎さんは奈月っちが辞めてもいいっていうことなんですか

木崎 そんなことは言っていないけど。それが奈月っちの人生にとって幸せなんだとしたら

それでいいんじゃないかと思うけど。

相原 そんなの悲しいじゃないですか。

木崎 だからそれは相原さんの気持ちでしょ。

相原 でも奈月っちだって悔しいと思うんです。このまま辞めたら。だから私は。

木崎 それじゃあ相原さんは奈月っちを応援した？回りの目を気にして

奈月っちを孤立にさせたのは相原さんにも責任があるんじゃないの？

相原 なんてそんなこと木崎さんに言われなきゃいけないんですか

木崎 でもそうじゃない？

相原 ねえ奈月っち、なんでこの人呼んだんですか？

木崎 は！？

奈月 笑 あ。ふたりとも。えっと、めっちゃ白熱してますけど

あと、あの奈月っちって。一回も呼ばれたことないんだけど。

二人 あ！

奈月 でも。あの、ちょっと元気でました。

ありがとうございます。いろいろ考えます。

決行前夜

電話で話す二人

山本 もしもし

木崎 もしもしゝ

山本 もしもし

木崎 ビオレ

山本 黒豆さん

木崎 ビオレ、寝てた？

山本 あしたの準備してました

木崎 いやいよ明日だね

山本 明日ですネ

木崎 どう今夜は眠れそう

山本 眠れなさそう

山本 おれワクワクしてますよ

木崎 明日からもっとワクワク

木崎 君のその一言で世界は一篇するんだ

山本 はい。

木崎 いいか。君は革命の戦士になったんだ。

木崎 いいか、ぶれるなよ。

つきぬける。

山本 はい！！！！

#今更

居間 テレビをみている父 そこへやってくる息子

段田 おー。今日は家にいたのか

蓮見 なに？

段田 いや家にいたのになって思ってた。

蓮見 いや、別にずっといたわけじゃないけど。

段田 あーそうなんだ。そっかそっか。

蓮見 居たとしたらなんなの？

段田 いや別になにについていうわけでもないけども。

いや最近、仕事とかどうなんだろうなって思ってた。

蓮見 仕事はしてるよ。

段田 あ、そうなの、知らなかった。

え、はじめたんだ。え、どんな仕事？

蓮見 パトロール。

段田 パトロール？パトロールっていうのはどこの？

蓮見 ここらへんの。

段田 あ、は。あ、それは、散歩っていうこと？。
なんだよ。おもしろいこと言うな。

まあでもいいじゃない。家に居るより、散歩する方が気分転換にもなるし。
な。

蓮見 金を稼げって。分かってるよ そんなの。

段田 そうだよな。うん。わかってるのもわかってるんだけどな。

蓮見 いろいろやってるじゃん。やって、やってさ。

おれがウツになってるのはわかってるでしょ？

だから自分のタイミングでいいって言ってたじゃん。

段田 そうだな

いやまあ

親だからね、できる限りはやっていこうとは思ってるんだけど。

いつまでも面倒みれるとは限らないっていうのもあるじゃない。

蓮見 そのときはそのときでしょ。

段田 そのときはそのときって言ったって。急にきたらびつくりするだろ。

蓮見 びつくりするけど。そのときは俺だっけどうにかするよ。するでしょ。

するしかないでしょ。

段田 そうだな。

蓮見 出ていってほしいっていうこと？

段田 そういうことじゃないよ。

そうじゃないけど、いつかはそうならないといけないよな。

蓮見 生活力がないんだよ。あと金がないの。

仕事さがすのにも金がかかる、息を吸ってるだけでも金かかる。

段田 そう言っても、俺らが死んだあとにも生きていかなきゃいけないわけだろ。

蓮見 そんなことはわかってるよ

わかってるならいいけども

段田 わかってるよ。そんなの

段田 どうすればいいかは考えてるの？

蓮見 それは かんがえてるでしょ

段田 たとえば

蓮見 じゃあこの状況どうやって出ていけるっていう考えが親父にはあるの？

段田 出ていきたいという意志はあるの？

蓮見 どうして出ていきたいと思うわけ、

クソ詰ままないよ、家にいても。羽ばたいていきたいよ。

段田 じゃあなにお前は金があれば出ていけるっていうこと。

蓮見 そうだね。先行くものがあればね。でもないでしょこの家にそんな金なんて。

段田 いくら。具体的には。

蓮見 え。くれんの。

段田 いくら必要なんだよ。

蓮見 まあ200万くらい

段田 200万？

蓮見 うん。ペイペイで

段田 それがあればやっていけるっていうこと

蓮見 くだいよ。

段田 そうか。200万円あれば行けるっていうことな

蓮見 あるの？

段田 ないよ。

蓮見 じゃどういう話？

段田 お前が金があれば出ていけるっていう話をしたからこういう話をしたんだろ
金がなかったらそういう話もできないっていうのか

蓮見 あ、でも。それは引越し代とかすぐに使っちゃって
その後は生活保護が必要になるから

もし役所から扶養にはいれないかって連絡がきたら。
入れないっていつてね、

段田 そうか。そうか。そうだな。生活保護は大切だもんな。

そのためには。俺等必要ねえんだろ。親関係ねーんだろ、関係ねーんだろ。

200万あればって簡単にいいやがって、そんな簡単じゃねえからな

蓮見 え。なんなの急にキレて。こわいんだけど。

こうなる覚悟で産んだんでしょ。

他の人はどうかしらないよ。おれはもらう権利あると思うけど。

おれはさ、ずっと思ってたんの。

障害がなく生まれてきたらどうだったんだろうって。

それによって損なわれているものを常に感じてるんだよ。

わかってるよ。いつまでそんなこと思ってたんだって。

でも俺は、これが俺なんだなんて、思えないんだよ。

段田 じゃあなんだ。おれと母さんがお前を生んだのは間違いだったっていうのか

蓮見 そうじゃないよ。働けばいいんだろ。働けば。

蓮見は家を出ていく。

#イデオロギー

山本 ああじゃ行ってくるわ。

善方 何の用事。

山本 演劇 だけど

善方 あー。そうなんだ。え最近忙しいんだね

山本 ああまあそうね

善方 公演とかはいつあるの

山本 公演は決まってるから、ワークショップとかいろいろ言ってるって感じ。

善方 ふーん

山本 …え。なに。

善方 え。なんか隠してる？

山本 隠してないけど。え。なになんか疑ってる？

善方 いや なんかさ。え、ゆうくん 政治のなんかやってる？

山本 政治の？なにそれ。知らない。

善方 いや、さ。この間流れてきたやつにさ（スマホを見せ…）

山本 あゝ

善方 これ ゆーくんだよ

山本 そうね。

善方 これデモってやつ？

山本 デモっていうか。まあ。デモか。デモだね。

善方 空気が操られてるとか言ってたけど。なんかはまっちゃってる？

山本 いやはまっちゃってるとかじゃないけど

善方 え演劇って言ってたけど、演劇はやってなかったてことだよ

山本 いや。ちがくて。

善方 いやちがくてじゃなく。

山本 ……

善方 わたしはゆうくんと、ずっと一緒に居たいって 思ってるの

それで最近いっぱい考えてて。考えてたんだけど

これ見たときに。

善方 いや ゆーくんの思想とか そういうのを否定する意味ではないんだけど

今後いつしよにいるひととしては、そうであってほしくないって思ったのね。

山本 ……じゃあ、どういうひとであってほしいの

善方 昔はそんなじゃなかったじゃん。

高校演劇で出会って。普通の演劇やってたじゃん。私達が

山本 なに普通の演劇って。

善方 だから 会話劇とか。

山本 演劇って もっと広義な意味でしょ 表現なわけだか

善方 でもこれは演劇じゃ

山本 炭鉱のカナリアでしょ。演劇は。平田オリザが言ってたじゃない。暗い炭鉱の中でガスがもれたときに最初に鳴き声をあげるのが演劇であって。それでいま、普通の演劇をやっている場合？恋とか愛とかロマンスもいいんだけどさ。まじでヤバいから。危機感もったほうがいいって。演劇やってるからこそ声なき声に耳を傾け 決して屈することなく大きなものに立ち向かなければいけないんじゃないの。

善方 ……わたしは ゆーくんが演劇やってるの すごい好きだし

応援したいんだけど いまのゆうくんはちよつと無理かも。

山本 あーそう そっか。大半のひとはそうだとおもうから ぜんぜん。うん。いいとおもう。

善方 わたしは ゆーくんとわたしの話をしてるの

山本 でも大切なことだから。

善方 ……もうわかんない。

山本 わかんないならしかたないな

善方 世界なんか変えなくてもいいよ、ゆうくんが

山本は家を出ていく

#力と正義

川下 すいません、昨日の夜の出張旅費です。

相原 あ、はい。

相原 すいません、お願いします。

昆野 相原さんこれさ、旅費、交通費のところ、3回目なんだけど覚えてるからかな
終電がある時間だから、タクシー使ってるのダメだよ
ちゃんとチェックしないとダメで。これで3回目なんだけど

相原さん、何年目だっけ。

相原 3年目です。

昆野 川下さんも分かっているとおもうんだけど。

相原 そうですよ。

昆野 担当が相原さんだから言ってもらえる？

なんでダメなのか説明できないと、今後も彼同じ感じになっちゃうから

相原 ああはい。わかりました。

相原 あの、さっきのコレなんですけど。電車間に合う時間だったじゃないですか
だからちよつとタクシーは無理で。一番安い経路で帰るってことで、すいません

川下 えいいままで受けてくれたじゃん

相原 いや。そうなんですけど。(こうやって私はいつも川下さんに論破されてしまうのです)

川下 夜間工事の予定なんだから、見積書はそれで通ってるんだから。

それが早く終わったから電車ってひどくないですか。

相原 気持ちちはわかるんですけど(逃げたい、今すぐ逃げたい)

川下 ぶっちゃけグレーじゃないですか？

相原 いや(私はこういうとき南の島にいきます。)

川下 だって実際、前までは通ってたじゃないですか。

急いで仕事終わらせたのに俺が損するって、意味わかんなくないですか。

相原 いや。いままでは、いままでなんです。すいません。

(青い空、白い雲、キレイな海。)

川下 別にいいんだよ。取り消しても。

でもそれは社員の交通費を自腹で出させるっていうことですよね。

こっちはタクシーにのって自腹にならないからやっていたの。

それって、いいんですか。

相原 まあ。でも。規定どおりではあるので(あ、大きなヤシの実。よいしょ。えいつ)

川下 融通きかねーな。だいたいさ、昆野さんになんか変わってからだよ

いままできちんとおつたのに、昆野さんがかおかしいじゃにですか

みんな言ってますよ。実際。

それなのになんで急にこっちが自腹きらなきやいけないのかって話ですよ。
なんかおかしいこと言ってます？

相原 (ぱー。ヤシの実おいしい) え、あ、へ？

川下 あ、もしもし。いや。まじ使えない経理でほんとやばいわ。

川下、出ていく。

相原 昆野さん、やつぱり無理です。あのひとやばいですよ。

昆野 なんでなんで。無理ですって。おいてもどってくればいいじゃない

相原 それが無理なんですよ。

昆野 前から言ってるんだけど。こういうことで時間かけないでほしくて。

相原 じゃあ、昆野さん、直接いったらどうですか

昆野 いや。相原さんが担当でしょ。

相原 それはわかってますけど。私が説明しても聞いてもらえないんですよ。

昆野 説明しないでいいんじゃない、話つうじないんだから。

え。なんか難しい。社内規定なんでできません、って。

相原 だから、それ言ったって言ってるじゃないですか

昆野 もうちょっとはつきり言ったほうがいいんじゃない

相原 はつきりいったんですけど

昆野 言ってる言ってるない。いまでもしやもしやしちやってるから

相原 もしやもしやってなんですか。

昆野 だから。言ってるないんだって。もっとビシっていわなきや

相原 言ってますよ

昆野 じゃいま言ってみて。

相原 いまですか、ここで。

昆野 うん。ここで。わたしが川下さんだと思って。はい。

相原 社内規定なんでできません。

昆野 もしやもしやもしや

相原 :

昆野 なんかさ。いい人でいたいみたいな感じにいる？

嫌われたくないっていうか、みんなから好かれようみたいな、そういう感じがある

相原 馬鹿にしています

昆野 じゃあもう一回いつてきて。

相原 変わらないと思いますよ

昆野 ためさないよ分からないでしょ

相原 いっしょにきてください

昆野 だから相原さんの担当でしょ。こういうこといつまでもできなかったらどうするの

相原 嫌なだけじゃないですか。避けてるだけじゃないんですか

昆野 そういう風に思ってたの

相原 はい。

昆野 私が一回いけばいいのね

相原 お願いします。

昆野 訂正するって

相原 ……。

昆野 逃げてるの相原さんじゃない？

相原 ……。

昆野 嫌われてもいいじゃん、別に良く思わなくてもいいじゃん、仕事なんだから

私はみんなに嫌われてもいいと思って仕事してるから、会社のために

相原さん。あんまり好きじゃないよね私のこと。でも全然平気、仕事だから

嫌われないようにしちやいけないんですか。嫌われないほうがいいじゃないですか。

お互いに。尊敬し合えるような、職場にしていたほうが絶対にいいじゃないですか
そうじゃないですか。

昆野 だったら相原さんがやってみれば偉くなって。

相原 奈月が休職して。もし私が管理職になったらって、

ガラにもなく思うんですけど。わたしは

やさしい雰囲気の会社にしたくて。

昆野さんがいると正直緊張するというか

対話っていうか。ちゃんと話せば、

みんな分かってくれるとおもうんですよ。言葉を尽くせば。

昆野 でも、それで会社まわる？いま回っている。

そういう風に言わないと分からないが相手がいるの。

だから私はやってるの。

相原 そんなこと私だってわかってますよ わかってまよ 八方美人って言わて

できないから それが家庭環境が影響しているのになって 複雑な家庭だったから

常に気を使っていたから

へらへらした表情がもう離れられないって。歯が痛い

昆野 それも言い訳だから、そんな

相原 そうやって…逃げ道を塞いで わかってますよ、そんなの全然関係ないって

じゃあ、私はどうすればいいんですか。

昆野 そんなの。私に答えを求めないでよ。

相原 歯が痛い……！

#まっとう

警備員をしている蓮見

そこへ善方が現れ、前を通ろうとする。

蓮見 あすいません、ちよっとストップ ストップ

善方 あの。ちよっと急いでて。

蓮見 ごめんなさい工事中なんで通れないんです。

善方 すぐそこなんですけど

蓮見 いやあのみんな迂回してもらっているんで。

善方 でも、ほんとすぐで。

蓮見 えほんとにすぐそこなの？

善方 ほんとに。もうほんとにすぐそこで。

蓮見 ああじゃあまあ、今回は。

善方、通っていく。

斎藤 蓮見くん。だめだめだめ。

蓮見 あ。斎藤さん

斎藤 だめだよ通しちゃ

蓮見 でも近いつて言ったんで。

斎藤 そういう風に言うんだって、ダメほんとに

蓮見 すいません。

斎藤 ダメだからね。

木崎が通っていく。

蓮見 あ、工事中なんで通れない、

木崎 ちよつと、え。なに。どうしたどうした

蓮見 いや工事中なんで通れないで、迂回してもらってもいいですか

木崎 あゝでもちよつと急いでて。はじまっちゃうんで

蓮見 ごめんなさい。迂回してもらって

木崎 迂回っていうのは、なに？ え、どうやって

蓮見 戻ってもらって、そこ右まがって、ぐるつと

木崎 あ、戻って。右まがって、ぐるつと・・・

(などと言いながらさりげなく通ろうとする)

蓮見 ちよつとちよつと待ってもらえますか

木崎 なんすか

蓮見 申し訳ない通行止めです

木崎 え、じゃあなにどうすんのあっち行きたいのに

蓮見 このこと通って迂回してもらって、

木崎 え、でも。さっき女の子通ってたじゃない

蓮見 わかんないっす

木崎 いや、通ってたじゃん。って。さっき。

蓮見 さっきがどうかしらないですけど、通っちゃダメなので。

木崎 差別だ。ジェンダー。僕が男の子だから通さないってそういうことですよ

蓮見 ちがいますよ。

木崎 じゃあわかった俺は通して、次から通さないってのはどう？

蓮見 無理っす。

木崎 だいじょうぶだいじゅうぶ、いけるいけるから、安心して。ほんとに言わないから

(などと言いながら無理に通ろうとする)

蓮見 ちよっとと(と言って体で止める)なにやってんすか

木崎 痛っ やば

蓮見 …いや。え？

木崎 赤くなってるんだけど…ミミズバレになってる。

蓮見 …いや、そんな。

木崎 なにこれ暴力なんだけど。痛。は？なんなのこれ。え、責任者だしてもらえます

蓮見 いや、責任者ちよっと。

木崎 ちよっとほんとに呼んで今すぐ、これ、あ、破傷風になっちゃう。

蓮見 そんな別に強くやってない…いやちゃんと爪きってるし…

木崎 呼んでって。いいから。はやく、呼んで来いって。

蓮見 いや、責任者はちよっと。

木崎 呼んでって、どこいるの？あっち。あっちでしょ(と、言いながらまた通ろうとする)

蓮見 だから(体でとめる)ちよっとダメだって(また、体で止める。)

木崎 なんなんだよ！！！！！！

蓮見 そっちがなんなんだって、だから(木崎がとうろうとする)ダメだってだって、ああ！

蓮見が倒れる。

木崎 ちよっ、は？おれ悪くねーし。

蓮見 待てよ。

木崎 しらねーよ

蓮見 だから！ふざけんなよ。通行止めなんだよ

木崎 死ねよ。

蓮見 お前が死ね

木崎 あ？

木崎が蓮見をぼこぼこにする

蓮見 斎藤さん・・・

どこからともなくカラスの鳴き声が聞こえてくる

木崎 なんだ、あれ。カラスの大群？

斎藤 はーすみくーん だいじょぶー？

遠くから、斎藤の声をきこえる

斎藤がカラスに捕まりやつてくる

斎藤 あ、そっちじゃないあ、あ、あ、ずーん

木崎 またやべーのがぎやがった

斎藤 どうしたの？

蓮見 あいつが通っちゃいけないっていても聞かなくて。

斎藤 おっと。それは、ちゃんと正さなくちゃいけないね。

木崎 なんなんだよ。お前ら。

斉藤 下がって、おれ少林寺拳法をやっていたんだ。

木崎 おっと少しはできるやつがきやがったか

斉藤 左中段構え や！。た！た！えい！

木崎 えーい

斉藤 うわゝ。

木崎 なんなんマジで。

斉藤 くそゝゝ。

木崎、はける

斉藤 いまこそ融合するときがきた

蓮見 それは無理です

二人は叫びながら立ち上がる。そして仕事に戻っていく。

#演説

山本 こんにちは。フリーで役者をしているビオレと申します。

みなさんは、自分がなんか言ったときに、なんか変な空気になったことは、ありませんか。

ワタシはよくあります。

今も若干その空気を感じます。

どうしてそうなるのでしょうか。

自分の何がいけないのか。

そのことに、ワタシは、ずっと悩んできました。

きつと同じような違和感を抱いている人達が

今日、ここに集まっているのではないかと思っています

そんな方たちに言いたい

なんか変な空気なんか負けるな！

彼らは、恐れているのです 正しき主張、正しい行為を。

だから、空気を操ろうとする。

真面目な人間を、バカにし、

能力もないのに何を言ってるんだと言って口を閉ざさせる

そうすることで、自分たちの世界を守ろうとしている。

能力のないものに価値がないのか。

そんなはずはない。

つまらなくても真面目に生きる人間が、

おぎなりになるよう世界が 正しい世界のはずがないのです。

私たちは何度も怒ってきました。

でも世界は決して変わらなかった。

溜息は、諦めという空気を作り、もう何をしてでも無駄なんだと、

そう思わせる空気すら彼らによって都合のよいもので

そうやって時間をかけて、彼らが作った世界はどうでしょうか。

私達はあきらかに間違っているものすら、覆すことができない
それでもまだこの国をあきらめたくはない
それは愛国心でもなんでもなくて
自分をあきらめるようなものだから
みなさん立ち上がるなら今です
空気なんかには負けるな
正しい行動は恥ずかしいことなんかじゃない。
ありがとうございます。

川下 あはは。

山本 …え、なんで笑ってるんですか

川下 あ、いや、はい、ちよつと面白かったので

山本 何がおかしいんですか

川下 いやすごい暇なんだろうなって思ってた。その、すごい言ってた話。
何の足しにもならなかったの。え、働いてます？

山本 いまは、役者としてやっていますけど

山本 ああ：え選挙とか出るつもりでやっていますか？

山本 いやそういうわけじゃないですけど。

川下 選挙は出ないんだ。それは本気でどうにかしようと思ってるってわけじゃないですよ。

山本 べつに政治家になるだけが世界を変える手段じゃないですよ。

川下 でもきれいごと並べるだけでも世界は変わらないうすね。

山本 でもきれいごとだからって言って、言わなくなったらよくないと思いますよ。ぼくは。

川下 迷惑なんですよ、アルタ前で。なんか意味あります？

山本 意味はあると思いますよ、それは。

川下 でも。うるさいなって思う人もいるわけで 配信とかでやればいいじゃないですか

山本 でも僕は、気づいていないひとに気づいてもらうためやってるんで。

川下 というかここ許可とってます。

山本 許可とってないです

川下 やば。許可とってないすんすか。やば。ちよつとまってくださいね。

山本 なにしてるんですか

川下 警察呼ぼうとおもって。

山本 なにしてるんですか

川下 正しいことをしようとしてます

山本 そこ。やめてもどういてももらえますか

川下 やだ。

山本 いや、ちよつとすいません

川下 むり、あ、わかりました。いまつれてきます

木崎 まてーい！

山本 黒豆さん

木崎 ビオレくん、ここは俺に任せて行つて。

山本 すいません。あゝ。足をくじいて

木崎 足をくじいても人生くじくな。

山本 黒豆さん

木崎 川下？ひさしぶりじゃん 川下 最近どう俺のいない職場はどうなんだ

これ作ったんだ、空気清浄機 全部木製 天然素材。太陽

ファンが回ると杉のいい香りがするんだ。でもおれ花粉症 まだ改良が必要

川下、お前の力が必要なんだ 待ってくれ。

川下、はける

木崎 逃げてったよ

山本 ……。

#会社をやめる

奈月、机の上を拭き、帰り支度をする。奈月は、今日で仕事をやめる。

有明は、パソコンで作業をしている。

奈月 有明さん 今日もおそいですね

有明 あ、あ、はい。

奈月 もう慣れました、しごと

有明 ぜんぜん

奈月 ですよね。

有明 あ、でも、この間、奈月さんが休んだときですけど

ワークシヨップ？みたいなのがあったんです。相原さん企画の

奈月 えゝそうなんだ

有明 それはちよつと面白かったです。

奈月 そつかそつか。

有明 御辞めになるんですね。

奈月 はい、御やめになります。

有明 あの：：あんまりしゃべったことなかったので

奈月 そうだね

有明 おはなしいたいなとおもっている。

奈月 わたしも

有明 ……あつ。そうなんですネ。

奈月 おもしろそうだから有明さんって

有明 あざす

奈月 おもしろい

有明 ……わたし。ダンスをしてたんです。

コンテンポラリーダンスっていう

よくわからないダンスなんですけど。

中学のときに 母につれられて はじめて 観にいつて
感動をしまして。

こんなふうには、よくわからないダンス だから ふれられるものがある
ということには 同様に わたしのようなよくわからないものも
よくわからないわたしだから ふれられるものがあるかもしれない
世界を変えることだってあるのかもしれないって思ったんです
ごめんなさい。えっとなんでこんなことを突然話したかというと。
なんだっけ。その。だから。

奈月さんが 喋ると 風がおる感じがして
世界がすこしだけ変わるような

そんな期待みたいなものがあつたので。
ちよつとさみしいです

奈月 あざす。：ダンスはいまはやってないの
有明 はい。封印しました。

奈月 なんて？

有明 そのチャクラを別のものにも使ってみたくなりまして。人生は長いので。

奈月 でも有明ちゃんちよつとね。出ちゃってるよチャクラ。なんか。

有明 え、そうですか。どこらへんが

奈月 なんか全体的に。

有明 え？ちよつとそれはまずいですね。

奈月 いつか見てみたいな。有明ちゃんのダンス

有明 どうですかね ずっと無視してるから

たぶんもう 話しかけても振り向いてくれないと思いますけど

奈月 あ、LINEやつてる？もしなんかやるときあつたら：

有明 あ、いえ。ちよつとその類は。まったく。

奈月 電話も？

有明 あはい、大学生時代にある事件が起きたまして

奈月 そのときにスマートフォンを自ら破壊しまして。それ以来、不保持を決め込んでます。
なるほど。ある事件というのがとても気になるけど。

有明 はい。

奈月 ：

有明 あ、えっと 住所ならお伝えできるんですが

奈月 住所？あゝじゃあ。一応もらっておく

有明 ちよつと待ってくださいね

付箋に住所を書く、有明。

それを待つ、奈月。

奈月 ：わたし 昔、小学校のときに男の子に意地悪されて、
で、いいかげん腹立って、その子をぼこぼこにしちゃったんですけど。
そのことを先生に謝れって言われて。納得いなくて。でもそのとき
父親が、お前は悪くないだから謝らなくていいって

言ったんです。

嬉しかったっすね

なんでこんなこと今思い出したんだろ。

だから。わたしは。これからも「言います」

有明　：あ、これ。

奈月　ありがとう。すごい字、下手！

有明　それは言わなくていいです。

奈月　：じゃあ、また。

#夜のまち　駅のホーム

夜の電車。うつろな電車。電車が駅につき、人々は帰路につく。

ぼろぼろの3人が座っている。

斎藤　メシくった？

山本　まだっす

蓮見　まだ

斎藤　あとで松屋いく？

山本　終電っすね。

斎藤　次の電車までまだ結構あるもんね

蓮見　あの眠いんで寝ていいすか

斎藤　ああいいよ、おれも寝るわ

三人は眠る

反対のホームに現れる有明

有明はホームにたち、電車を待つ。

街頭のような明かりがスポットライトのように光る

だれもないホーム。

手持ちぶたさで、右足で地面にキレイな円をスッと描く。

しばらくつけるものを切られていく

そして羽ばたくように、自由を謳歌する。

美しいダンス

いつの間にか、そのダンスにみとれている、3人

ダンスが終わり、小さく拍手する。

それに気づき、ありあけは、動揺する。

そして

斎藤「ブラボー！」

山本「ブラボー！」

蓮見「ブラボー」

有明はピースする。

幕